

# 〈国語科〉確かな表現力を育てる学習指導の在り方

～国語科における言語活動の充実を通して～

多治見市立昭和小学校 教諭 長江 理可

## 概要

新学習指導要領の総則では、思考力・判断力・表現力等の能力を育むことや、主体的に学習に取り組む態度を養うこと等が示され、児童の発達の段階を考慮して、言語活動を充実することが求められている。また、社会環境の変化による子どもたちの言語力の低下が指摘されていることから、各教科等において言語に関する能力の育成が求められている。国語の授業において、一単位時間の授業の中で、どのような知識や技能を身につけたらよりよい言語活動につながるのかを明確に示すことで、一単位、一単位の授業が言語活動につながっていることを実感できると考え研究実践を行った。

授業実践では、「つけたい力やねらい」「既習事項」「児童の実態」から決めた**単元の貫く言語活動**を行うことや、**小集団追求**を行うことは、教師の指導の観点、児童に任せる**主体的な活動場**がより明確となり、**児童の学習意欲を喚起**するとともに**児童がねらいを達成**することにつながるようになった。

## 1 主題設定の理由

### (1) 研究目的について

新学習指導要領の総則では、思考力・判断力・表現力等の能力を育むことや、主体的に学習に取り組む態度を養うこと等が示され、児童の発達の段階を考慮して、言語活動を充実することが求められている。また、社会環境の変化による子どもたちの言語力の低下が指摘されていることから、各教科等において言語に関する能力の育成が求められている。言語活動とは、各教科等の目標を達成させたり、内容を充実させたりするための手段であり、言語活動の充実を図ることは、確かな学力の育成につながるものと考えられる。

各教科において言語活動の充実（書く・話すを充実させていく）を図る上で、基盤となるものは言語に関する能力であり、言語能力を育成する教科の中核となるのが国語科である。したがって、国語科には、児童が実生活や各教科等の基本ともなる国語の能力を主体的に身に付けていくことができるよう、様々な言語活動を工夫し、その充実を図っていくことが求められている。

言語活動を充実させるためには、言語活動と授業内容につながりをもたせることが大切であ

る。国語の授業において、ただ単元を貫く言語活動を設定するだけではなく、特に「読むこと」領域の場合、言語活動が読みの目的となるように単元を構成する必要がある。一単位時間の授業の中で、どのような知識や技能を身につけたらよりよい言語活動につながるのかを明確に示すことで、一単位、一単位の授業が言語活動につながっていることを実感できる。そして、言語活動で何をするのかを児童自身が明確につかめる。そのため、授業の終末に言語活動につながる活動を取り入れるいれこ型式で授業を行う。

また児童が、話すこと、聞くこと、書くこと、考えること、判断することなど、いろいろな学習能力を使いながら、自分の力で知識や考え方を「学びとり、表現している」という実感をもたせるために、小集団追求を仕組みたい。そのことにより、児童が能動的に学習に向かい、達成感を味わうことができるのではないかと考える。

### (2) 児童の実態

今年度受けもった6年生は26名である。児童に国語科に関する学習アンケートを4月に実施した。「国語の授業が好きだ」と答えた児童は19%、「まあまあ好きだ」と答えた児童は

28%、「あまり好きではない」と答えた児童が46%であった。国語に対して苦手意識がある児童が多いことが分かる。また、「国語の授業でしたことを使って話したり、文章を書いたりすることは好きか」という質問に対して、「好き」と答えた児童は23%、「まあまあ好きだ」と答えた児童は30%、「あまり好きではない」と答えた児童は34%、「好きではない」と答えた児童は11%であった。このことから、表現活動が苦手な児童が多いことが分かる。

また、平成30年度の全国学力状況調査の結果から、国語において、目的や意図に応じ、内容の明確にして、詳しく書いたり、必要な情報を見つけて読んだりすることが苦手な児童が多い。更に、互いの話を聞き、考えの共通点や相違点を整理しながら、進行に沿って話し合うことが得意な児童が多いが、よく話す子や考えを言える児童のかげに隠れてしまっている「ぶらさがり」の児童も少なくない。そのため、児童が自分で学びとり、表現していく場を設定する必要がある。

## 2 研究仮説

言語活動を充実させ、読みが目的になるように単元を構成し、自分の考えが再構築できるように小集団活動を仕組むことによって、学ぶ意欲に繋がり、付けたい力が児童につくのではないだろうか。

## 3 研究内容

### 研究内容 1

言語活動を充実させ、確かな表現力をつけるための単元指導計画の工夫

- (1) 目的意識や課題意識がずれない工夫
- (2) 言語意識（相手、目的等）を明確にし、児童の実態にあった言語活動の設定の仕方

### 研究内容 2

自分の力で知識や考え方を学び取り、表現しているという実感をもたせるための国語の授業における工夫

- (1) モデルを示す
- (2) 主体的な学びにつなげる

## 4 研究実践

### 研究内容 1

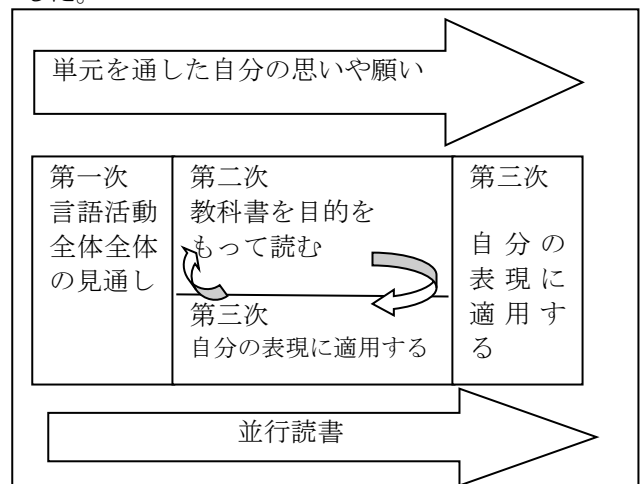
言語活動を充実させ確かな表現力をつけるための単元指導計画の工夫

#### (1) 目的意識や課題意識がずれない工夫

##### ① 単元構成の工夫

事例1 6年生  
 〈単元名〉本は友達  
 〈教材名〉森へ

終末の言語活動をイメージしながら、第二次の本文の読み取りが目的意識や課題意識からずれないようにするためには、単元構成を工夫する必要があると考えた。そこで、第一次では言語活動の見通しをもつ。第二次では教科書を目的的に読めるように、常に第二次で第三次を意識できるように、第二次の授業の終末では毎時間、第三次につながる活動を取り入れるようにした。

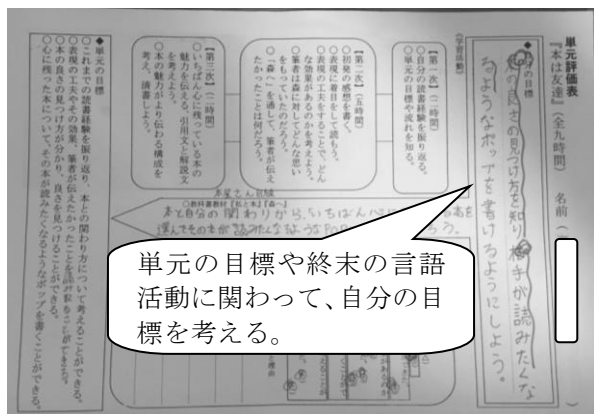


(資料1 単元の構成について)

教材文「森へ」では、第一次で自分の読書経験をふり返し、「自分の関わりから『いちばん心に残っている本』を選んで、その本が読みたくなるようなPOPを作ろう」という単元の課題を児童へ提示した。作ったPOPは学校の図書室に掲示することを児童に伝えた。

そして、単元評価表を児童に示し、単元の目標を明確にした。単元の目標や学習過程を示すことで、児童は願いや思いをもって学習に臨むことができた。児童は自分の目標として、「本の良さの見つけ方を知り、相手が読みたくなるようなPOPをかけるようにしよう。」や「筆

者の表現に着目して、表現の工夫を見つけれられるようにする。」といった目標をたて、それに向かって学習に取り組んでいた。

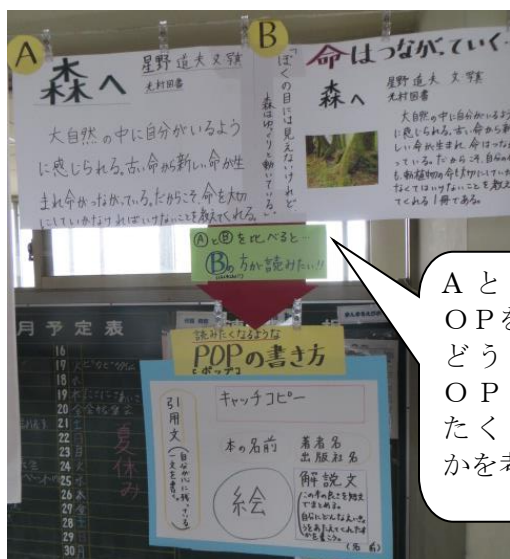


(資料2 単元評価表)

## ② 読み取るための観点をとらえる工夫

第二次では、終末の言語活動をイメージしながら、第二次の本文の読み取りが目的意識や課題意識からずれないように「表現」に焦点を絞って行った。その間、POPに書きたい本を決め、並行読書も行った。また、いきなり自分のいちばん心に残っている本でPOPを書くことは難しいと考え、第二次の読み取りの時間のまともに毎時間「森へ」のPOPを書き、POPを書くポイントを教材文を通して指導した。

第一次では、「森へ」の教師自作のPOPを2パターン提示した。AとBのPOPであれば、どちらが読みたくなるか児童に質問した。

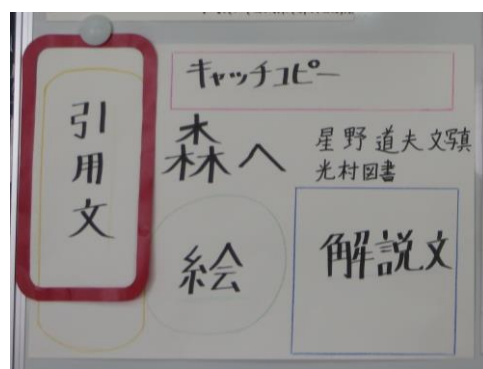


(資料3 POPの見本)

すると、全員がBのPOPの方が読みたくなると答えた。その理由として、「写真や絵があっ

たほうが分かりやすい。」や「キャッチフレーズみたいな物が目を引いて、読んでみたいと思う。」、「引用されている言葉が気になる。」などが挙げられた。そこで、児童からでた意見をもとに、読みたくなるPOPにはどんなことを書く必要があるのかを考え、POPの書き方として提示した。

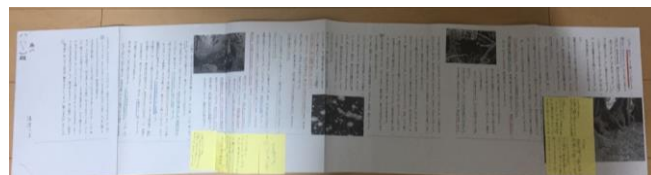
第二次では、「表現」に絞って読み取りを行った。そして、POPのどの部分を書くための学習なのかを児童が意識できるように、今日の学習につながるPOPの部分を書いた枠で囲んだ。



(資料4 POPの書き方)

そうすることで、児童は今日の学習がPOPのどの部分を書く事につながるかを意識して学習に取り組めた。また、自分が選んだ本をどう読み取ったら、POPが書けるのかも意識し学習に取り組めた。

読み取る「表現」も、比喻・擬人法・諸感覚・筆者の考えたこと、疑問の5つに絞り、表現を工夫することでどんな効果があるのかを考えた。すべての表現を考えるのは難しいため、班で一つ読み取る表現を決め、本文全体から読み取りを行った。本文を巻物のようにつなげ、全体が俯瞰できるようにした。



(資料5 本文を俯瞰する)

本文全体を俯瞰できるようにすることで、場面場面ではなく、全体を見ることで場面のつながりや全体を通して表現を工夫するとどんな効果があるのかを本文全体を通して考えられるようになる。そうすることで、POPを書くとき

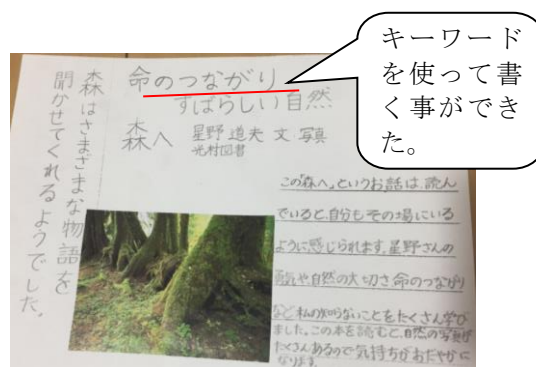
に引用部分と解説部分、キャッチコピーの内容にずれがでないと考えた。各班から擬人法の効果については、「人間みたいに表現しているから、木がまるで生きているかのように、自分のこととして考えられて分かりやすい。」や「命がつながっていることが感じやすい。」「森全体が一つの生き物のように感じられる。」「森は生きているということだから、読んでいる人によりそれを感じてもらったり、想像したりしやすいようにしている。」という意見が出た。比喩の効果については、「想像しやすい。」「情景が伝わってくる。」「そこにいるような気持ちになれる。」という意見が出た。どの班も本文の根拠をしっかりと示しながら話すことができた。また、作品の本質に迫るような表現の効果について発言ができていた。しかし、一方でPOPの引用部分を書くときに、好きなどことを書く児童が多く、表現の効果とつなげることに課題が残った。

第二次と第三次をつなげるために読み取りを「表現」にしぼることで、児童は何のために学ぶのかという目的意識をもちながら学習ができた。また、課題を解決することが、終末の言語活動につながることを意識して学習の取り組むことができた。しかし、POPを書くという本時の終末のまとめに本時の学習が生かしきれない児童もいたため、全員が生かしきるための手立てを考える必要がある。

そこで、解説やキャッチコピーを書くための学習では、表現に着目させることで、筆者の森に対する思いの変化に気づかせるようにした。そこから、筆者が伝えなかったことを考え、それをキーワードにしPOPにそのキーワードを入れるようにした。キーワードとしては、児童から「命のつながり」「命のリレー」「自然の大切さ」「生きること」などが出できた。

キーワードを提示することで、なかなか文章が書けない児童も、そのキーワードを使いながらPOPに解説を書いたり、キャッチコピーを書いたりすることができ、学習したことを生かして、POP作りをすることにつながることができた。そして、森へのPOPを書ききり、達成感を味わい、次の自分のいちばん心に残って

いる本のPOP作りへの意欲につながった。



(資料6 森へのPOP)

## (2) 言語意識(相手、目的等)を明確にし、児童の実態にあった言語活動の設定の仕方

事例1 6年生  
 〈单元名〉本は友達  
 〈教材名〉森へ

昨年6年生を担当し「森へ」の学習をした際に「森へ」で学習したことと言語活動のつながりを、なかなか見出せなかった。そこで、今年は「森へ」学習でまず何を読み取るか、そしてそれをどう言語活動で表現させるかということ考えた。新学習指導要領によると指導事項は

- ・日常的に読書に親しみ、読書が自分の考えを広げることに役立つことに気づくこと。
- ・分の中で語句の係り方や語順、文と文との接続の関係、話や文章の展開、話の種類とその特徴について理解すること。
- ・文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめる。
- ・文章を読んでまとめた意見や感想を共有し、自分の考えを広げること。

となっていた。また、終末の言語活動として教科書では、いちばん心に残っている本について、文章にまとめることになっていた。

記述例では、紹介文が載っていたが文章が書く事が苦手な児童には、なかなか取り組みにくいのではないかと考えた。そこで、どの児童もが「やってみよう」と思え、指導事項が指導できる終末の言語活動はないか考えた。

この単元では、新指導要領の「文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめる」を受け、「いちばん心に残っている理由」



が伝わるように表現する必要がある。また、自分に関わらせて書く必要がある。ただの本の紹介ではない。せっかくいちばん心に残っている本を紹介するなら、紹介した人達に読んでもらえるようにしたと考えた。5年生の「千年の釘にいどむ」の学習で、「本をすすめよう」ということで教科書にPOPが紹介され、書き方も詳しく載っていた。また、「百年後のふるさとを守る」では、「伝記を読んで、自分の生き方について考えよう」という学習をしてきている。そこで、この二つの学習の発展版として、POPを書くという終末の言語活動にするのはどうか考えた。5年生で学習したこの2つを生かし、さらに6年生の紹介分の記述をまねたものをPOPにするとことにした。また、「森へ」の教材文も、「表現」に着目させて読み取るなかで、筆者の考えと自分の考えをつなげ、筆者の思いを読み取り、それをPOPの解説文に書くというつながりをもたせる学習を進めることにした。

児童の「やってみた」や「書いてみた」という思いも大切にしたいと考えた。そこで、POPは図書館や書店で見かけるため、図書館や書店に行き、どんなPOPがあるのかを調べた。すると、書店に掲示してあるPOPはどれも目を引き、POPを読むと本を手に取りたくなるようなものばかりだった。そこで、書店の店員の目線になって、相手が読みたくなるようなPOPを書くということを、単元を貫く課題に設定した。また、多くの人に見てもらえるように、図書館に自分のいちばん心に残っている本と一緒にPOPを展示することに決めた。

第一次の導入では、単元を貫く課題を「本と自分の関わりから、いちばん心に残っている本を選んで、その本が読みたくなるようなPOPを作ろう」であること提示した。また、書店で飾られていたPOPを書店の承諾を得て、児童に提示し、最後の出口の姿を示した。また、夏休み前の貸し出しの時までにPOPを図書館に展示し、夏休みの本の貸し出しの時に、高学年図書室を利用する人が見て、本を選ぶ参考にもらえるようにすることを児童に話した。

児童はPOPにとっても興味を示した。自分のいちばん心に残っている本をPOPで紹介し、

図書館に展示するという見通しももて、第二次の学習に意欲的に取り組む姿がたくさん見られた。

実際にいちばん心に残っている本とそのPOPを図書館に展示したが、自分の紹介した本が借りられているのを見て、嬉しそうにしている児童や、友達が書いたPOPを真剣に読み本を借りる参考にしてしている児童がたくさんいた。



(資料7 図書館の様子)

児童の実態に合わせて、終末の言語活動を「紹介文を書こう」から「POP作り」に変えることで、文章が苦手な児童もイラストなどを入れながら、抵抗なく書きあげることができた。また、書きあがったものを見せ合い、読み合うなかで書いた達成感を感じ、生活の日記に「POPが書きあがって、図書館に展示するのが楽しみだ。」と書いている児童もいた。



(資料8 児童が書いたPOP)

また、新指導要領の指導事項であった「文章を読んで理解したことに基づいて、自分の考えをまとめる」こともでき、ねらいも達成することができた。しかし、書く事が苦手な児童でも文章を書くのが楽しいと感じるためにはどう

すればいいのかという疑問が自分に残った。POPのような短い文章では自分の考えや思いとつなげて書けたので、次は意見文を書く単元で、内容を工夫しようと考えた。

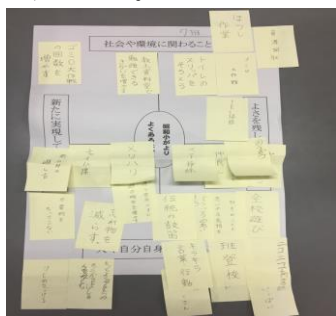
事例2 6年生  
 〈单元名〉意見を聞き合って考えを深め、意見文を書こう  
 〈教材名〉未来がよりよくあるために

この単元では、未来の社会がどうなってほしいのかを意見文を書く単元である。指導目標「未来がよりよくあるために」では、次の事が挙げられる。

- ・話し合いで深めた考えをもとに、構成を工夫、して自分の意見を明確に伝える文章をかくことができる。
- ・互いの考えの違いや意図をはっきりさせ、計画的に話し合おう。

児童の実態を考えると、それぞれが違うテーマを決めた際に、互いの考えの違いに意図をはっきりさせて話し合うことが難しいと感じた。テーマを決める際にテーマをしぼることも考えたがそうすると、児童の実態から考えると同じような意見文になってしまう可能性がある。そこで、意見文を書く内容を社会の未来ではなく、昭和小学校の未来とし、「未来の昭和小学校がよりよくあるために」という意見文を書く事にした。

昭和小学校をテーマにすることで、6年間過ごしてきたこともあり、自分と違うテーマであっても話し合うことはできる。また、話し合うときに、質問や助言がしやすくなる考えた。社会や自然環境、身の回りのことにも目を向けられる児童もいるので、昭和小学校を通して、そういったことに目が向けられるように、最も大切にしたいことを決める際は、ワークシートを利用した。



(資料9 テーマを決めるワークシート)

意見文を書く内容を身近で自分たちにとって考えやすく話しやすいものにテーマを変えることで、話し合いの時には、助言をし合う姿が見られた。また、同じテーマの児童でも、互いの意見を聞き合いながら自分が気づかなかった良さや改善点を整理し、考えを深める姿がみられた。

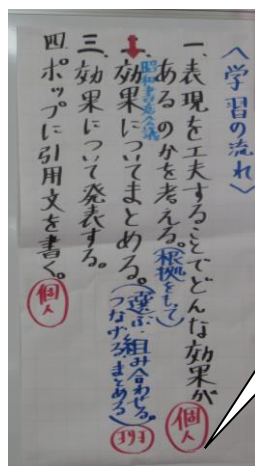
「つきたい力やねらい」「既習事項」「児童の実態」から決めだした単元の貫く言語活動は、教師の指導・援助の観点、どんな学習活動をするのが明確となり、児童の学習意欲を喚起することにつながる事となった。

**研究内容2**  
**自分の力で知識や考え方を学び取り、表現しているという実感をもたせるための国語の授業における工夫**

**(1) モデルを示す**

**① 学習の流れを示す**

自分の力で知識や考え方を学び取るためには、まず何を本時学ぶのかという学習の流れを示す必要があると考えた。教材文「森へ」では、毎時間同じような流れで学習を進めた。毎時間、導入で学習の流れを確認した。



個人で行う活動なのか、班で行う活動なのかを明確にした。

(資料10 学習の流れ)

学習の流れを示すことで、自分たちが今日何を学習するのかという見通しをもって学習に向かうことができた。また、何を個人で考え何を班で話し合うのかを明確にすることで、何をすればよいのか、何ができればよいのかが明確になり、学習に取り組みやすくなった。

**② 発表の仕方聞き方を示す**

発表をするときに、どう話したらいいのかが

分からなくてなかなか発表できない児童がいる。全員が発表の仕方が分かれば、発表しやすくなるのではなかと考えた。そこで、表現の効果について発表をする際に、型を示した。

効果について発表するために、「私たち△班は○○という表現の効果について考えました。「    」や「    」、「    」という本文の言葉から、○○には～という効果があると思いました。」というように話し方の型を伝えた。また、表現や根拠に効果にこだわった。各班の発表の際にも、本文を根拠にしていない場合、どこからそう思ったのかを、繰り返し問い返した。そうすると、本文を根拠として考えることができるようになった。また、仲間との関わりの中で根拠を明確にすることもできた。根拠を明確にすることを続けていくことで、ものの見方や考え方が身についてくると考えられる。また、考えを発表することが苦手な児童が班の代表として発表することができた。班で話し合うときに、何を話し合いまとめていけばいいのかという筋道を示すことにもなった。

しかし、ただ話し合ったことだけ発表するだけでは、学び合いにはならず、ただの聞き合いになってしまう。知識や考え方を学び取るためには、発表の時に班同士が互いの考えの相違点に注意して聞き取り、考えをつないでいく必要がある。そこで、教材文「未来がよりよくあるために」の学習の自分のテーマを決める際に、班で「昭和小学校のよさ」について話し合いをした。班でよさをどんどん出して、それは、4つの観点別に分類し、班ごとにどんな良さが出てきたのかを発表した。その際には、同じことを前の班が言ったら、その意見は言わずに、まだ出ていない意見だけを発表するようにした。そのため、他の班の発表を聞いているときは、自分達の班で出たものとかぶっていないかなど、考えながら聞くことができていた。また、ただ班で話し合ったことを話すだけではなく、自分達の意見と比較し、聞くことで自分達の班にはなかった意見が出た時には、拍手がでたり児童どうして、「それはどういうこと。」などと質問したりして、児童同士のやり取りも生まれた。そして、書く事についてテーマを決める

際には、ほかの班の意見で納得し物を選んで自分のテーマとして意見文を書こうとしている児童もいた。

ただ話し方の型を示すだけではなく、発表するときも、考えたり比較したりしながら聞けるように、発表をすることで、児童は考え方を学び取れるようになってきた。

## (2) 主体的な学びにつなげる

### ① 小集団追求を取り入れる

アンケートの結果から、授業中、友達の発言を聞いて自分の考えが深まることもあるという質問に対して、クラスの多くの児童が「そう思う」や「まあまあそう思う」と回答している。そのため、小集団で課題について追求する、「小集団追求」を学習の中に取り入れることによって、児童がより主体的に学習に取り組めるのではないかと考えた。

教材文「森へ」では、毎時間集団追求する時間を取り入れた。表現の工夫が与える効果について追求する際には、なかなか個人では効果について考えられない児童もいた。しかし、班で表現の効果で本文からそれぞれ共通することを出し合ったり、質問し合ったりするうちに、こんな効果がありそうだという答えがどの班もみえてきていた。更に、教師が「まとめると」と各班を指導することで、話し合ったことをまとめ一つの考えにすることができた。一人では考えにくい課題であっても、小集団で追求すると、たくさんの考え方が出てきて、それをまとめながら言葉を補いながら、課題解決に向かっていくことができた。



(資料11 本文から根拠探しながら追求)

小集団で課題を解決していくことを楽しいと感じている児童が多く、自分の考えを明確にす



るためにも、早く話し合いたいという児童もいた。

しかし、ただ単に課題を提示するだけではなく、どう解決していくかという手順や考え方を示すことが必要である。

課題解決に向かうために本文の「ハクトウワシの小鳥のようなさえずりです。」と「ハクトウワシのさえずりです。」を「あるなし読み」で考えさせた。すると、児童からは「小鳥のような」という比喩があることで、身近に感じる。」という意見が出た。また、「深い木々がおしよせる浜辺」と「深い木々が生える浜辺」と「置き換え読み」で考えさせた。すると、児童は「おしよせるの方が状況がよく分かり、ちょっと怖い感じがする。」という意見が出た。全体で読み取る手段を教えることで、個人追求のときはもちろん、班で追求する際にも、違いについて話し合い、効果を考えることにつながっていた。

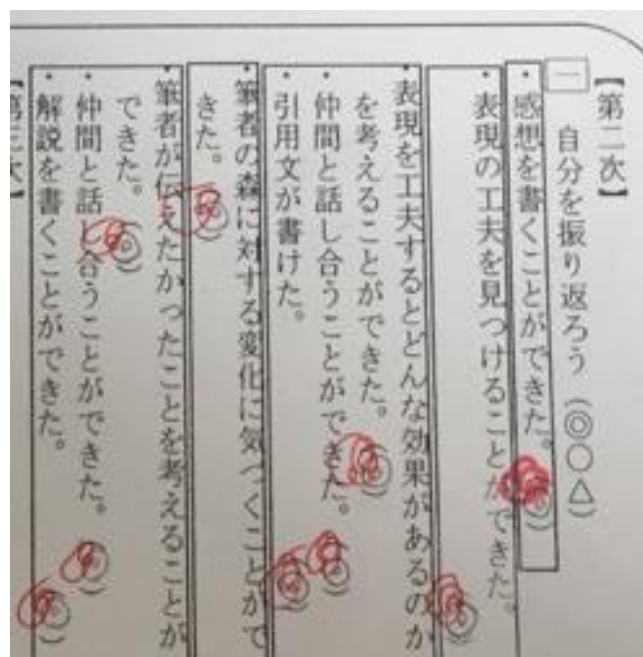
多くの児童は小集団追求を取り入れることで、主体的に学びに向かい、学んだことを言葉にしたり文にして表現したりしている。アンケートからも、「友達の発言を聞いて、自分の考えが深まることもある」にお4月であると答えた児童は34%だったが12月には42%になった。また、「あまりそう思わない」と答えた児童は、4月には26%であったが12月には19%に変化した。この変化からも、小集団追求で自分の考えが深まったと感じる児童が増えていることが分かる。

更に児童が考えの深まりを感じられるように、話し合いの成立の要件を明確にしていきたい。目的も確認のためなのか、意見の出し合いのなか、今後は課題解決のためになか、提案するための追求なのかをはっきりする。また、何について話し合うのか、話し合ったことをどうするのかを明確にし、小集団追求することでだれもが自分の考えを話しながら、意見を練り合える小集団追求にしてかないと、児童に力がついていかない。

## ② 終末に自己を評価する行う場を設定

教材文「森へ」では、自己評価として二つの

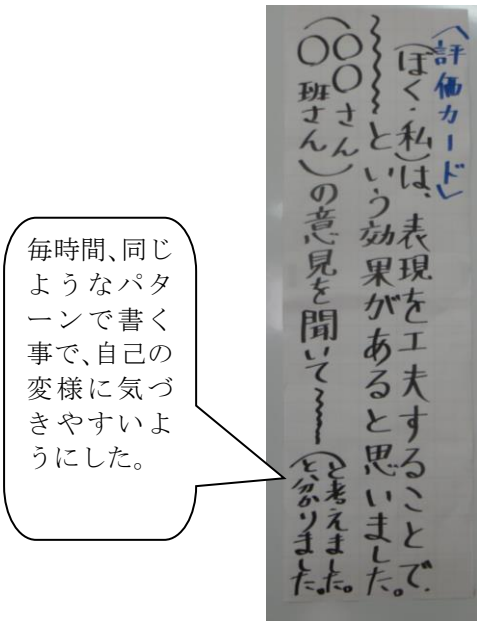
ことを行った。一つ目は毎時間のねらいを達成できたのかを自分で◎○△で終末に評価する。一単位時間ごとにどんなことができたらいのかを単元の流れと一緒に示し、それを毎時間児童は自分で評価する。事前にねらいや今日の授業の出口が分かり、児童は見通しがもてる。また、教師自身が児童にどんな力がつけたいかを明確にすることで、その単位時間にどんな指導援助をしていくと、児童がねらいを達成できるのかということを考えて授業を仕組むことができる。



(資料12 自己評価)

二つ目は、集団追求をして自分の意見がどう変わったのかを書くようにした。ただ集団で話すのではなく、自分の意見がだれのどんな意見でどう変わったのかを児童に意識させたいと考えた。自分の変容を終末で評価するということを前提にして学習に臨むことで、話し合いをするときに、自分の意見と仲間の意見を比べながら聞けるようになるのではないかと考えた。また、小集団で追求することで、変容した自分の考えをどう評価で書くかという書き方も示した。そして、自分の考え方が変容したことに気づけるようにした。仲間と意見や考え方が同じ場合もあったので、どこが同じだったのかを書かせるようにした。





毎時間、同じようなパターンで書く事で、自己の変様に気づきやすいようにした。

(資料13 評価カード)

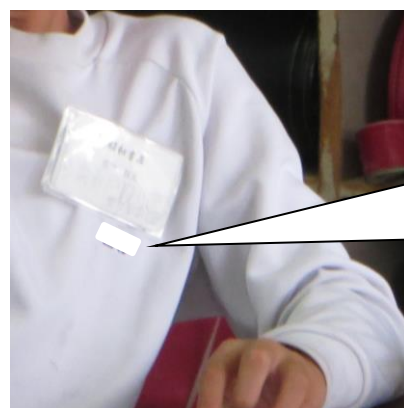
初めは、自分ができたことしか書けない児童もいた。しかし、同じパターンで繰り返し書く事で、自分の意見とどう違ったのか、また同じでもとらえ方が違ったなど、自分の考えを比べで評価カードが書ける児童が増えてきた。また、追求した仲間や、発表した仲間の話を自分の意見と比べながら聞くことができるようになってきた。また、評価カードを書くことで、仲間との関わりのよさを実感することができた。実際に「森へ」で筆者の森に対する思いを読み取る学習の評価カードに、「筆者は最初、森に対して怖いという気持ちをもっていたけれど、〇〇さんの「木々などの命が受け継がれていて、物語を聞かせてくれるように思いました。」という考えから、筆者は森に対して怖さが消えたのだと思い、自分の意見が深まりました。」と書いている。筆者の思いが怖さから変化していることに集団追求することによって、気づくことができた。そしてそのことを評価カードで児童自身が振り返ることができた。

このように、自分一人では気づけなかった学びに気づくことができ、それを実感する場合は、児童にとって有意義であると考えられる。

### ③ 言語活動を楽しくさせる工夫

児童が主体的に学びを進めるためには、言語活動を工夫するだけではなく、言語活動に気持ちを向けるための、「わくわく感」＝「やってみたい」「知りたい」という気持ちが必要であ

ると考えた。そこで、ただPOPを書くのではなく、POP作りを書店の店員の目線になって行うことにした。書店の店員の目線に立つと言うことは、本をいかに売り込むかが関わってくる。せつかく図書館に掲示するのならば、その本が手にとってもらえるようなPOPを作ってほしいという思いから、書店の店員の目線になることを児童に提案した。高学年であるため、そういったなりきる活動に抵抗がありかと思っただが、児童は楽しそうと、わくわくしてPOPを書くという言語活動に向かう意識になった。また、書店の店員さんになりきるための小道具として、名札を用意した。名札は授業中につけていいことにした。ただ、高学年であることから、全員で名札を付けるというよりは、つけたい児童はつけ、つけることに抵抗がある児童は、机の上に出して見えるようにし、書店を常に意識できるようにした。



名札には昭和書店名前おすすめの本が書いてある。

(資料14 名札)

また、小集団追求をするときに話し合いではなく、「昭和書店会議」と名前をつけて、話し合いの始まりでは、「昭和書店会議を始めます。」というようにした。

このように、小道具や名札を付けるなどの細かい仕掛けをつくることで、児童はわくわく感を感じ、やってみたいなど思えるようになる。児童も実際に、名札を付けることで、常に書店の目線で考えるということが、かなり意識できた。だからこそ、小集団追求にも意欲的に取り組むことができ、学んだことを表現する場でも、自ら進んでどんどんPOP作りを行えたのだと思う。こうした細かい仕掛けは、高学年であっても有効であることが分かった。

## 5 成果と課題

### 研究内容1より

#### (1) 目的意識や課題意識がずれない工夫

- 言語活動を明確にすることで、児童が学習に対して意欲的に授業に取り組むことができる。また、第二次の活動の目的がはっきりとし、児童にとって学ぶ必然性が生まれてくる。
- 単元評価表を児童に示し、単元の目標や学習過程を示すことで、児童は願いや思いをもって学習に臨むことができた。
- 一単位時間の中に言語活動（話す・書く）を取り入れることで毎時間児童が言語活動（第三次の活動）を意識できる。また、児童は本時の学びの内容が言語活動につながっているという実感がもてる。
- 第二次で読み取りを「表現方法」に絞ったことで、表現が工夫されているということは、作者や筆者の意図があることに気づき、自分のPOPを書くときに、選んだ本の中でも「表現の工夫」に着目して読んだり、書いたりすることができた。
- 一単位時間に読み取りと書くと言語活動の二つの言語活動まで取り入れると、時間が限られてしまうため、読むと書くの軽重をつける。

#### (2) 言語意識（相手、目的等）を明確にし、児童の実態にあった言語活動を設定する

- 「つきたい力やねらい」「既習事項」「児童の実態」から決めた単元の貫く言語活動は、教師の指導の観点、児童に任せる主体的な活動場がより明確となり、児童の学習意欲を喚起することにつながることとなった。
- クラス全体の実態ばかりを考えると、さらに力を伸ばせる児童にとって実りのないものにならないように、更に力が伸ばせる児童に発展的な課題を与える。

### 研究内容2より

#### (1) モデルを示す

- 学習の流れを示すことで、自分たちが今日何を学習するのかという見通しをもって学習に向かうことができた。
- 話し方の型を伝え、表現や根拠に効果にこだわることで、本文を根拠として考えることができるようになった。また、仲間との関わりの中で根拠を明確にすることもできた。

○話し方や聞き方のモデルを示すことで、発表するときも考えを比較したりしながら聞くことができ、児童は考え方を学び取れるようになってきた。

- 話し方や聞き方のモデルで示したことを国語の学習だけではなく、他の教科でも行うことで確実に話し方や聞き方を定着できるようにしていく。

#### (2) 主体的な学びにつなげる

- 一人では考えにくい課題であっても、小集団で追求すると、たくさんの考え方が出てきて、それをまとめながら言葉を補いながら、課題解決に向かっていくことができた。
- 単元評価表を示すことで授業の出口が分かり、児童は見通しがもてる。また、教師自身が児童にどんな力がつきたいかを明確にすることで、その単位時間にどんな指導援助をしていくと、児童がねらいを達成できるのかということを考えて授業を仕組むことができた。
- 評価カードで他の児童と自分の考えを比較し学びの変容を書くことは、自分一人では気づかなかった学びに気づくことができ、それを実感する終末の活動は、児童にとって有意義であった。
- 小集団追求するときは、ただ単に課題を提示するだけではなく、どう解決していくかという手順や考え方を示すことが必要である。
- 他の児童と自分の意見を比べるだけでなく、課題に対して何が深まったのかということが分かる振り返りをし、学んだことをどう生かしていくかを考えさせていく。

## 6 研究のまとめ

4月に国語のアンケートを取ったとき、国語の学習が「好きだ」と答えた児童は19%、「まあまあ」が42%、「あまり好きではない」が34%、「好きではない」が3%だった。12月に同じアンケートを取ると、「好きだ」が30%、「まあまあ」が46%、「あまり好きではない」が23%、「好きではない」が0%と変化した。小さな変化ではあるが、国語を少しでも多くのが「楽しい」「やってみたい」と思い、児童に力がつくような国語の授業をこれからも実践していきたい。